金瓶梅四巻

初刻精刊梅巻

へ13
2924
3

へ13
2924
3

鼻山人戯作
契情肝粒志後編

一名 廓（サトノ）遊（ユメ）女

全三冊

評註

前編の客人今宵ハ何とかいふ名にてあらんかとおもふ多くあれどもいまだ是とこたへうるものなし
よくかんがへて見よと四方人ぐりひとりの是
者ハ君侍八をきゝて云ふ人ぐりひとりの是
ものゝ名まのうべ一応ハ多くあるべきの名をしてて
侍八と改名せしをもつてこれ侍八ものゝ名をよび一ものゝ名をあ一むべからず

知多郡
美嶺村
村木

契情肝粒志

けいせい きも つぶ し

小冊の
後編とく
序をと
こゝに後編ものゝ

○肝粒志後編目録

上巻　月天慌惚て奪なく天

中巻　雪天慌惚て大抵ば地

下巻　花天慌惚て善悪なむ人

以上全部五巻

文政九丙戌年正月發兌

契情肝粒志後編上

江戸　鼻山人著

○月天慌惚て奪なく天

夫色情の為天六道の羅漢も銀丸の尊者も心を奪ずといふ事なれども

忍ぶべき色慾の煩悩なりと佛の金言

実なるかな依も繁昌松田屋の倡妓　男

人ハ難儀　先若ひ者を石の俗ふ駄ごと
宜敷くも安くト鄙の中を思ひいそ
かひて命と嘆くこと為る金八と法ともふまひ
提のちひを向へ下て寄居れ〳〵月の
新暗きをとさんとト道ての難を通んあ
一生懸命の見ふまもせ小塚あをとふ往の
宿ふとう道中の旅人とうちまうてゆく
程とそあま　夜も深〳〵トたけの塚就て

第加の新ちづま法先をうてふ声ふあり
男人モウ寄きひも拾ふすめくそんふ
命ト移換とおもひ〳〵てめさふ道ごとギ
いさゆく程ぶ歩くんでいそ新あの拾ぶふ
金八きさぶらう男の見で世へ拾そろ〳〵
第臥さ附ふ新ぶ明て見れば人間もあふ
来ぶぶらいづまあも駕を雇て寄ぶい
四　アイこうちもそのまで拾ぶふすョ

とうやうさうと
まで来るものゝ是らうさえまあ仰ゝ
彩了簡ざ回サアいづまも遠くの勢ひ
身のうへまれば道中を仰ゝまでも行てまづ
関所を越てうらう了簡の付けやうもなぎ
まんせう食やうとやあ駕ごうもざ是らう
関所とうべまづ栗そうの番所ごど
女の身でまうゝ自出ふ通るるもなね

とうとう
陣法度のおぞ〳〵とまあそこが容易ふとさ
見るものゝ回ハテとづ一生懸命で駕ざあるス
まんまと抜ことを越さうもれたたゝ遠くが勢
らうとものゝ大丈夫で駕ざあるすその仕と
いつの廓を思んで出る最ようゝ出るも出
関所を破りく通りさ科人なれどとも
るらく引戻するのふびとものと見ハ見捨
のまく命も惜まねまで駕ざあるすゝ

とのきまでおしたをんしゝねゝあるゝ柿ひるゝ
しんるゝもはぎまぜんとせて金八もギヨウと
せゝぶ今文案をゝ書くあの絵方あくゝ絵よ
まゝのうゝ毒を食べ皿までトイ答しゝて金
ぶん某もそのきでゝ考るゝれどかんどしの
伊園茶を紙るゝ脱のゝあゝ国る四半も
その場へ行くあらゝ又よゝ思案もはぎゝひ
せゝ整ともちゝく駕るゝ考たゝはぎゝゝす

トいゝの和く道中駕るハイモシ海ゝかごゝ安くゝ考
せゝ考てゝはゝんあせく金アイおゝ考ゝまゝう考
せゝ見ゝうゝたゝゝう紙若ゝうけゝ図ゝさゝサ
宿の持ゝあまでゝいきくゝ図ゝあゝぐゝゝ
後未でゝゝうゝぐゝゝあんまゝう考ゝもゝく
長形ゝゝうゝんゝの図そんゝうゝモシ二百ゝゝ
さゝゝ金ヨシ〳〵と後提の中ゝう結を抗
出〳〵サア〳〵二百ヨ和ゝゝ和ゝゝだゝいゝ

いでくるせく 図 ふるとやとおおう籠のまぐ
はすすアわ茶ふ茶ト四方人を茶サツ〳〵と
卵 ひて形人を八も駕ゐ法き法わどそく
籠若の紙ふ茶る又茶て駕を産ひ糟
ぐ板戸と隠くふ紙て眉ハかごふ茶茶
茶通し歩形てあ人ともいきくも眠らず
長一ヶもどふ作関わまで是姫溝なヶ人し
ふまらせくいそ死るまく絡ふ栗その

あくふ茶目の七ッまくふ茶ふるその道のり
紙ふ住の紙より紙人合九里十一丁まり四方人
かひて紙ぐき方役もんのうちふ糸う垂け
まび金八わも船いひ含めて茶の宿より
その〻通をソロ〳〵と色木綿の布子と古御
の帯持茶の茶茶を見立て茶
集めその多いうれを客ふふ茶紙くいも
まぐ茶ふる衣形そど風呂茶ふ包ことん

就金八ふ持せ
内のうふ出
拭ふを拭
持を提て
たまつり宿の
ふ泊り少し
泊しの
はそのふ

もちろん金八もさぶらふ
せて作きを結を履せ
ふ自分いひざうのおう
ふ人とも十ふんふ身持ふ
中を通り接ふ所関所の
ふ行きて赤ふれがそや
を滑出きんとする時旅人とのふ
ふ寄ふ寄ふ寄ふ寄ふ寄ふ

殺人も無ふ又ふれね女子とふ物ども
平生の容形ちふ中田の者とや呂ひろん
何ものふも分ず命を出ずるものともあの
日ハ夫羽の緒家夷代のおうらわく結
の外遊も遊蘇なし多ふあ人が風俗
旅人の姿ものくざれが番士もうれを見
道世ふ四方人が里の旅仕度と金八も
その智略の器ろきを伸くもかんじる

他者いとくとられ孫金時代のるすまれば
朝ぼらく〜ト係る関和を謝つべ金
まつく〜歳市まるる伊賀和と男ら
よ敷まるればたすく通るる中ずず
いらんや女ふ和のくをや
結髪四方人は是より安堵のおひを法
て先づ古河の縄よるる向ある茶てんの
門へ立寄て皆らく休息あし又変て

中ぶんふちのなしと孫人の姿とまう金人のろ
とも古河の新ふいとう始めて宿りを求め
やしらまーやトおつと突る浅島ふ興うる
ん死しの疾絶ちち安居て四方人も係る金
鉢のうき苦労せしも時雨ゆへぞぬーの
き質ふ悔悔さざろうフット逃ひしあく
縁もだらしんどおのれせて此まるるふ
絶ありしさぞ孫のたひおそろしんと

ねりひきんせうがとれも矢張不足すぎと
ハテ合ごねぎごやるかす 金 ねのこさんざるゆすあらく
さらねりの石でハぬく菓ぐやうなまゝ之の
鍋ち名 鍋ち名ぬく 焼ぬ民をそのやうふまでねりて
くまるトいのハぐのこと線うとねりのトたとく
ぬくく火の中でもあるの中でも 四 お敷ひきん
せんかく 金 ちれるヨ 四 それゆくころちも
鍋ち名 鍋ち名を居てとっさ式ふ為 親方さんふ

えんを知ってもあるの菓子知のうくこまうら 羽二日ハ子
寛くくト駕を中とひて下まづ吉俵ぐさや
里 胴 接 出の 梅田村へ 紙ライすやうふいさ
ーかせう 金 それぐよりらうおこ二線付クとえ
いひぐらかくいのあふあつてえるトすあもの鄙
ホ親 紙ぐかくくあるる江戸ッ子の岩さホハ
俵ッくれぐきホのぬううまハをの梅田村と
んぎーとれるぐうう 四 それううさえハ子

又ぞうとものすゑ紙ざんす 金 ハテぞう
あらぬへでも扨りひめざ通う事成ふものやう
たとへ田舎でそうしても出ア有り難くのぞ
四 吾儀もさうで扨ぎアんすヨ出こ二まう是
まぢい事が張とく居させうあんまう男臥さ
とも扨りひせんが扨うなりのごモウ儀とあん
堪殺しの事さらきふ男臥が出へこと生も
おり方さうで扨ぎアんせう整とものおくお体

そんし 金 そんが〻今後の〻〻枕をたうく
して寝るのざまさが変らう相移へく行く道
扨よくゆして寝ゆへと整日繁をと待のわも
百が勢ひ 四 おこ三さうで扨ぎアんす 金 そん
あら錆笹を排よ事で不一す繁して意や
せうト二百ぞこの二人まへ金八わ真ふ浜
してカノ道筋を問の是より相移の相用へ
扨事ゆへまづ上列へ出てそれら山通て

稜父をとらまるゞ（ナぢんの近道ぢゃト駕籠
る作金八もかさごゆ道）ト一ナ礼のべこ出ち
来るサア〳〵すぐうト出て来さうち
安んぐらゞ見ゆもるるうち上列〳〵出て稜父く
をるのゞ近ゞざトいるヨ回それいよう駕ゞえん
〳〵たサア〳〵来く抱きまゝなん〳〵金いらさま
寝やせうトあくい乗ちゐゞして床いこうふ
並べとも一ッいわんの足せうけざうり屏風ざうと

門口ポチ〳〵時〳〵床のうち五時時い
トいるゞ変ゞ作のさざうりその沼へいるる変
戎結びしう他者もうれいまうざうう彩て
その後明ナてあくいもそや煮ゞね議あれば
貴〳〵とおよ〳〵して吉沼の福をいゞこち
時ふうう今日のきさんじんものどうふ
時ふるる時も十月小夾風まくも紀まふの
いろ〳〵ふ幸色誉ある山賀を独りい府

かき物の場体物ハ竹杖ふんどゝ
ニなりきちゝるゝもすモしおうどゝどゝでおと
ゝますゝんの酒ゝでまてきてゝゝんなせくと
ゝゝふなくくまさる 金コウ 駕の元やとれら
上列へ出てくゝんぐらぐゝぐよゝらゝの 金
ゝゝ呂形伊香保の湯治とゝくますあまゝ
とれらゝゝ揚くゝ切てゝゝもあり山もあり揚列
道も苦風ますことゝお女中さんをほまこの

道中ゝんとゝくゝふ揚の形ねりのゝどやゝりゝ
ゝゝちらゝどゝらゝじゝる通ゝの玉ゝ女の駕輿
でゝゝゝらゝゝゝまでゝトいゝるもまくゝれん百
移ゝ中道中でゝゝう日を考ますおゝあれで
ゝゝきゝトいゝゝ宿のゝく氏宿ゝら伊香保の
湯治ゝも形ッまゝる客ゝを考くゝ移ゝゝ
ゝゝゝまゝゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ女中さんを考ゝて考ゝゝゝゝゝゝゝゝ

だんな 金 ゑうらう 勇程あるの 金 ハテいらい
あつても大るすアごぎりやせんあんでもお治
まで通〜〜響音めい〜も此方結ひでモシ
ちゝ費ちとさうゆ〜〜 金 そひつアちうくゝのんごの
金 何ニモシちくゝるすアどぎりやせんいづます二
ちゝまぶつ通きゝトいのんごのものとあア
接組 金 すさゝごちさぶひゝやア繋ぎ
ずるゞくゝ湯でいつがよゝゆも怪ふゝと繋のいゝ

かうゝをとゑんごうすがぬくチトは来〜〜ふモシ
だんな二枝ふまゆけやせ〜〜うらぶごで女中
さんを来てやさうゆ〜〜 金 すゝ二枝すらべ
のちゝやせゝとのうゝふやア道で洒ひの
稼ぎうるすア 金 モシとやアいそず
とものでどぎうやを烏 金 ちゝ来で昌金ゆ此方ら
まのうゆくと寛てうをとうくゝごのものを 金 そん
なのうかうちやせゝいさゝは 金 南瑞一ッと

きめやせう 金八ぶんぶの長ぼそ如ぐぬく
うら国らせのんざ木の木持紙素まわやか
早ぐれぬぜ 金三ッ合長ざト金八より南
猿一ッ黄ッく壺茶仕入の紙たぐこへの
中へ入金ふんどへ猿ア木の木胡麻ひの
ひが明さトはぐぬきく 四方人を素とれ
よりたりの紙道へ曲ん金八もちぬねたの
鷲を俵ふ附猿ふ有もたりも

畑ぐりうトはのへぐ又田ある石も出ところ
石ふ百姓家しこはがしき家石糸ふありく
紙束の風素ものもっとうり猿人もまれはして
たるへ重のへ紙肩ふをるのと馬
ぐりうあれば 金 かへ鷲の元や氏石すぐん
田畑ぐりうで商人やの家ものへ押
はけ昼時分でもあらへぐちのぐでもする
ぐるふわぐ氏さたふあるへの 金 分とれう

二三日泊りと習の宿がござりますそやうな
所迄お咎めのあるござりやせんがそこで昏
合を咎めぬと又そのさきわやうなわも
ござりやせん【全】なやうそんざふ自由な
道ぐのうれを知らぬ吉田の高で来商
我営でうれべよりうさ【全】なやうにアリ
近ぐうえとうえさうあるべくが
よりなど兼がなぐまで来さ【全】モシ長崎ア

大工をさうあるなる【全】サさうヨ紙あるの
【全】とうやうあるさんかいふあるとこ
所アやうお武家ふわも出舎又働人元
あも附合りんぐらう大概五音の調子で
分りかす【全】というアあるれさぐらう宮て
まくさるまうア道中の一夜くんぎるで言
さんじかの面白イるもあるぐらうの【全】仮ザ
いうらまるまうんかの孤ふ化されてりぐで

きさまを一ツ拍子とちめんぷんでホンニ
いろ〳〵ゴザウやせん　金　あんまうさうめある
めへぜたゑあやア皆さん二六のそば掘り延
た皆人の四五郎が独りでせ〳〵あるゆめあざ
らうの　ゑ　すや〳〵　上形ア悪人ざらく狐の
うへを乗こと〳〵古狸ト扱のへまるびう組
ふんどをとろうぜん　ゑ　ヨウト合点まつうせト
ス〳〵いろく為ぎクれば程ちゆ〳〵カノ名の

猪ふいろる為ふ扱の〳〵四方人金八も音の
おのぶを頭い賀る卵の雪奴も一ぞひきと
やゝて結を結ひサア宜〳〵為ア中ぜう
金　タイ　ぜんぶア兄狸ら為〳〵武時四方人を
小役場より立ち出く歩ふ賀ふ為ば　ゑ　天
サア兄ろうが一下のしぐ恥を生ろう合点ゴト
為を解れて形程ちそあれをやその日も
西ふ頭〳〵ひ為べり〳〵カる形東あぐ出

たちうろうまづ彼方を見れば小高き山あり
て松柏さんくとしてひ蔵う是方を見れば
風ふ波さわ拾尾荒ましくして湖あり
ト雲よぞうの光景ふとく成形き見も
果しなく死霊ふさまぐらうの凄く岩や
をあて日も暮るのべ宿ゑべき家もなく者の
遠ふ海を義理辺ふ伏猪とうろともぬ
夜を明さべきうくぬん細きるのまらんと

あちまち魂祈清とんで金とうやアまのア
とんぐ西へ出さの代西で日でも暮るやアおわ
緩ぎだ何とぶん道をいそひで苦ひてく金
何ニサ楽ぐるるやアなるアなぬくなるアなぬ
らで出てく一ぷくやらうろ金ゆとそれぐ船ら
ア暮到ーとぐつまう鶯を働ふおろ
あへ出来ぬ怒くくと狙仲一輪ゆゆく博物
面動くき色もるしう指のまるぐ

どくあり 金 サアくそくきぬくう 図 つく
ねこを きのごとくもしきものといろちやちやん
ぢんの 繼結 一手 枝サ 金 コレ熱く 滑 結るなどと
鶯をそくきといつるヨ 図 そこをあのこと
かごをきといひあさるのうくまるよしゆもやや
せう 金 コレ先きの赤こを酒ふ酔 湯 たりう
たじあ又ひあの 巻 物ふでも化されさうこ
る 蕪 といそずふ 恼 を 付 てそくきに 白 ぶ

今ふ考らアべらぶう 図 コレサえん
まひ 部 〜 亀をそんあふ熱く
あぶ知あさんあ 湯 場のたらふを見る
やふ亀の生ツ白イ 形 ねいねつら 剛 く
ぬくヨ 金 フシひ奴らア女を法まと 鶯 くと
アとゆする 考 ぶる 図 ヨ 知れさるヨ人ふ
ゆぶのアねくふ考ぶあるぶらうあと
いふまくく金八ものをとあるとが弱多をアを

あいよく附てあげらんト抱ひるゐ二ちぞん
江戸ッ子の素性をアキまく抑生うんと
ちんぢゃ奴らアいうト抱のやアぐつでぢんぢう
寺の仁王をアろるやうふ乱く アモ身を生
志やアぐつてもの尻うらうとくおとう上ゲアぬく
のぢ道中の雲女でもぢゐのうふでもとれ
知れる野郎おやちゃぬくサアゆすぐあらゆを
洗てアろろ坐とでも動のおやちゃぬくアろくと

尻を搖ッて嘲うとうとあせば 図 コレ見キ 雑
面の娘ゲ目寝をもちさやうふとんなふ蓋る
魂まろるのアぬくけるる散うッとアろくまく
栗稽の関不破うろまく化てもかんとんの
尻尾をアんせさげうんの手波見ぬうまやう
アノ女を連てくぬ法まくぬて見厠の
雲ふまんてアんせるコレくいからまんぬ
おのつてそんなお自ら切ッてもの疾ふはう

江戸紙であらつまるゝ所海道でもつと
煙りたく生薪の松といふ事なアこと
るのてぐんすヨきのふ江戸うらの初作ふ
繁昌松田屋の四方人といふ倡妓廓
紅葉〳〵たるれど歌方がたらひゆてその
るゆ世ゆるく沙汰〳〵ふ病身倡妓の
たゆ嵩ぶんのうち指ゆの家ゆきさけゆ
アゆゆてあれどいづまゆ行出を捜〳〵

再び廓く引戻さゆび外ゆふ拘ゆる狀
見なケ出〳〵ゆのあゆび岩形作ゆ二十あ
ト点きふ垂限ゆ寇ツて居るアノ蛇の中
の代物とれゆまるアゆてさ見ゆきまゆる
ものゆ見かゆ狀ゆ引のゆどせび郭屋の
狀今あきまのひそれぞやア市ゆ業ゆく仕
業他出も狀ゆゆ出れまひトゆのゆゆゆゆ
骨を折てゆぎ〳〵ゆまで注まて来さ

のごまアさう世のつて種とも法合〜〜
ゝんさんセト煙草のらす鼻さるのちゑ
とも今わゝくぐれば四巻人ゝ捨くゝ加ゐゐん
出てく四コレノねゝさん方のさゝ〜のとゝう
廓と猛者〜たものでごぜんすゞ捨まゝ
がさのお牛でゑをゝ通〜てちさんまゝや
ゝろちも一せう勉令下のうき者労〜たゝん
もあり今さうゝゝ戻さんまアどの

都で二分の者患ゞ勉ゝ〜せゝうどゝのごで
ゑをゆゝとけてその肩打賃の二十あもる
あれゞ上ゲ〜ゝんまれど私いるゞんすゞ
ゝふ呂〜十まゝあアゝすこれをね〜ちまふ
上ゲつま程ゝぶゝのぞゝうれで不簡と整とも
ゝゝく泊りまで者ゆく行てちさんセトふゝうゞ
ゝまく手紙で包んゞふ判をさ出せゞ四ゞ
ハアさゝゞア廓のあゝらんだけあゝと〜

知多大蔵図書

きうりんざ十あの全へあり雑くぐまりち
アラやゥおあ〜ゥやせゥまんざら二十あへ
あるあひをゥんすく〜ちぐへまぐん虫トひ
そゥアラやゥあんまり曲ぐまへト蛇のんあんざ
あぐる
あ鮭あるまゥふゥそゥんくゥふゥう

肝粒志後編上終

書尾州 米屋岡七 林武羅喜